



## シュトイリ爺さんの死

田口 二郎

記者時代の旧友笹本駿二君から十月九日付グリーンデルワルト投函の次の葉書を受け取った。

「きのうからグリーンデルワルトにきている。笠さん(笠信太郎氏のこと)と君と三人できてから二十八年ぶりだ。きょうは、一郎のお墓に詣ってきた。一郎の分も生きてやらねばならぬことお互いだ。ヨッホに登った。ここに出ている日本人向きの案内に、田口兄弟が、グロースシュレックホルンに初登頂、と記されているのを嬉しく思った。エミール・シュトイリが数日前八十五歳で大往生を遂げ、おととい盛大なおとむらいがあったそうだ。ブラバント氏は健在という話。帰ってからゆくり話をしよう。」

右葉書の内容だが、グロースシュレックホルンの件は山登りを知らぬ笹本君の間違ひか、もしくは印刷自体が間違っていたのか、実のところは、戦前ブラバントにつれて見一郎と登ったシュレックホルンの東壁のことだろうか。何れにしても面白いことだ。

昭和46年(1971年)

12月号(No. 318)

社団法人 日本山岳会  
(J. A. C.)

## 目次

## 本文

|                  |   |
|------------------|---|
| シュトイリ爺さんの死…田口二郎… | 1 |
| 入沢文明さんを惜しむ…渡辺公平… | 1 |
| 第四回図書交換即売会…      | 2 |
| 図書交換会出品目録…       | 2 |
| 黒部幻影…柿原謙一…       | 3 |
| ソ連アルビニズム年鑑…      | 4 |

## 海外通信

|            |   |
|------------|---|
| ジャモニから…    | 5 |
| ラリ・グラスより…  | 5 |
| アルジェリアから…  | 5 |
| バルセロナにて…   | 5 |
| ザンビア便り…    | 5 |
| アフリカにて…    | 5 |
| フエアバンクスより… | 5 |
| イスタンブールより… | 5 |

## 1971年のヒマラヤ(日本隊)

|          |   |
|----------|---|
| 雪男探検隊…   | 6 |
| ダウラギリ4峰… | 6 |

## 会員通信

|               |   |
|---------------|---|
| アルプスより…安川茂雄…  | 7 |
| 玉山登頂記…沼倉寛二郎…  | 8 |
| 梓川だより…茶谷東海…   | 8 |
| 深田先生の初盆…川北 仁… | 9 |

## 会務報告

|             |    |
|-------------|----|
| 11月理事評議員会…  | 9  |
| 第276回現地小集會… | 10 |

## 図書室便り

|                 |    |
|-----------------|----|
| 新刊図書受入報告…       | 10 |
| その他…            |    |
| ミュンヘン・ユース・キャンプ… | 7  |

## 入沢文明さんを惜しむ

渡辺 公平

山ほどあるが、とりあえずここに悲しい訃報を伝えるとともに、どなたかが心暖かかった山の人について書いて下さることを願うことしきりである。

(四六・一〇・一九)

入沢文明さんが十月二十九日の朝亡くなった。六十九歳。肝硬変であった。三十一日の日曜日に私は永福町の自宅で用をたれた告別式に出席してその足で所用のため新潟に旅立った。新潟行特急のなかで私は入沢さんと山の最初の出会いを思い出してみた。入沢さんは山登りではもとより新聞記者としても私の先輩だった。私が新聞社に入ったころには、もう新聞連合から朝日に移って活躍していたように記憶する。

昭和七年か八年の暮だったと思う。新米記者も少しは休みがとれるようにに里社の仲間を誘って五色温泉へスキニに出かけた。粉雪のちらちら舞うなにかを宗川旅館に向って登って行ったら六華クラブの前に体格のいい五、六人のスキーヤーが立っていて、その一人

から「オイ、ハムさん」と呼びかけられた。それが入沢さんだった。入沢さんはその後新聞社をやめて交通公社に入り文化部長や旅行部長を歴任、私も鉄道省を担当させられたため仕事上の関係はますます強くなった。私はいい先輩がいて幸せだと思った。

そのいい時代は戦争でたち切られた。昭和十二年秋私は召集されて大陸にもってゆかれたのがはじまりで、十八年四月交通新聞創刊のため上海から呼び戻されるまで、私は入沢さんとは会う機会もなかった。

東京に帰ってきて知り、かつ驚いたのが新聞創刊の準備は私の先輩や友人たちの間で着々進められ、すでに創刊号からもう何号かが日刊で発行されていた。その基礎をつくってくれたスタッフの一人が入沢さんだった。入沢さんは私が着任してから毎日のように編集局に現われては、新聞記者時代の思い出話をしながら私を激励してくれたりした。

大東亜戦争の拡大で私は再び召集されて日本を去った。そして台湾で敗戦を迎え二十一年の三月復員した。その春も終って初夏に入ったころ当時駿河台にあった岸体育館でぼつたり入沢さんに会った。「生きていてよかったな、ちようどいいや、日本山岳会も出直さなきゃならないんだ、手伝ってくれよ」といわれた。懐かしいJACのルームはまだ建てられていなかった。

それからしばらく、あまりお役にも立たなかつたが私は入沢さんのお手伝いをした。

一緒にした山岳会での最後の仕事は丹沢の「国体」だった。責任感の強い入沢さんのそのときの姿を私はいまでもはつきり思い出すことができる。第一日目、本部として大倉尾根の一本松

付近に登っているときだった。

ふと振りかえると、はるか下の方を一人の登山者が登ってくる。その格好がどうも入沢さんらしいのだ。社用で北海道だかどこか遠くへ行っている第一日は間に合わないかも知れぬからよろしくと私は頼まれていた。

滝のように汗を流しながら登ってくる入沢さん待ちうけながら、たいへんな強行軍をしてかけつけてくれた先輩の熱意と誠実さに私はうたれた。そのころJACが担当していた国体登山の在り方方向について会報一五七号に入沢さんは詳しく書いていたが、JACの足跡を示す貴重な一つの資料として残るだろう。

最近では少々健康をそこなっているが、もうこのような元気な「入りチャメ」さんの姿に二度と接することができないと思うと、なんともいえず寂しさが心のなかを吹きぬけてゆくのである。(十一・三)

#### 第四回図書交換即売会

ここの図書交換即売会は第四回を迎え十月二十三日午後二時から本会ルームで開かれた。出品数は和書百七十二、洋書十二、雑誌・部報多数と昨年を上廻り、盛況であった。例年通り出品物に番号を付し、その番号を係りに申し出てもらって午後三時半締め切りで抽籤を行なったが、桑原武夫「チヨゴリザ登頂」に十四人、日高信六郎「朝の山残照の山」特装版十三人と多数の申し込みがあり、にぎやかであった。ここの目玉出品は木暮理太郎「山の憶ひ出」特装版(百部限定のう九十三番、アンカット)という新品同様のものである。これは最低価格八万円で記名人札を行なった結果八万五千五百円で落札された。洋書は今回は出品が少なかったが「キャンプ・シックス」に

四人が申し込んだ。来年の秋にも続けて行なう予定なので、各位の出品をお待ちしている。なお売り上げ金のうち五割をルーム基金に、五割を図書基金に寄付していただいた。(山崎)

#### ▼図書交換会出品目録▲

##### ▽和書

世界文化地理大系、中央アジア、インド・パキスタン、ソ連邦、西アジア  
スイス・オーストリア、ラテンアメリカ、カナダ・ブラスカ・北極(平凡社版) 各三〇〇円

山の憶ひ出(木暮理太郎) 竜皇閣版 上・下(限定版) 入札

日本山岳名著全集、ウェストン・小島島水編、横・辻村・藤本編、大島・板倉・伊藤編、細井・加藤・松井編、三田・西・桑原編、石川・深田・村井編、西岡・平賀・黒田編、志村・中村・茨木編(あかね書房) 各三〇〇円

立山群峰(冠松次郎) 第一書房 一五〇〇円

上高地の大将(木村植) 実業の日本社 二〇〇円

山を考える(本多勝一) 実業の日本社 一五〇円

谷川岳ヒゲの大将(高波吾策) 実業の日本社 二〇〇円

上越国境(角田吉大) 大村書店 四〇〇円

山岳大観(各務・麻生) 木暮社書院 六〇〇円

ラスキン研究(御木本隆三) 厚生閣 五〇〇円

日本高山植物図譜(三好・牧野) 成美堂・上巻 八〇〇円

湖沼巡礼(田中阿歌麿) 日本学術普及会 一五〇円

幽山秘訣(三田尾松太郎) 富山房 三〇〇円

雪の上信国境(塚本閑治編) 山と溪谷社 五〇〇円

山岳美(日本アルカウ会) 日本アルカウ会本部 六〇〇円

日本山水論(小島島水) 隆文館・縮冊版 一五〇〇円

大雪山(小泉秀雄) 大雪山調査会 三〇〇円

日本アルプス第一巻(小島島水) 前川文栄閣・縮冊版 二〇〇円

ヒマラヤの旅(長谷川伝次郎) 中央公論社 八〇〇円

日本地理大系山岳篇(山本三生) 改造社 五〇〇円

釧路の窓(山崎安治) 二支社四〇〇円

穂高星夜(山崎安治) 朋文堂 四〇〇円

アルプス登攀記(ウインバー・浦松訳) 上・下、岩波文庫 五〇〇円

ある優柔の独白(中村清太郎) 朋文堂、著者ハガキ付、署名入り 千円

マナス山登頂記(横有恒編) 毎日新聞社、全隊員署名入り 五〇〇円

朝の山残照の山(日高信六郎) 二見書房・署名入り限定版 一五〇〇円

カラコラムの夜明け(コンウェイ、吉沢訳) あかね書房 七〇〇円

エベレストへの闘い(ノートン、山崎訳) あかね書房 六〇〇円

山の序曲(山崎安治) 朋文堂新社 六〇〇円

川内山とその周辺(笠原藤七) 三〇〇円

日本風景論(土志賀重昂) 岩波文庫 五〇〇円

ヒグマとの戦い(西村武重) 山と溪谷社 五〇〇円

ニッポン動物記(斐太猪之介) 山と溪谷社 五〇〇円

山書研究十二号(日本山書の会) 三〇〇円

山の詩集(前田鉄之助) 朋文堂 二〇〇円

詩集歳月の歌(尾崎喜八) 朋文堂 三〇〇円

スキー・テキスト(全日本スキー連盟) 朋文堂 五〇〇円

登山(日本山岳会編) ベースボールマガジン社 五〇〇円

日本アルプス山人伝(安川茂雄) あかね書房 四〇〇円

新しいスキー術(近藤訳) 三笠書房 一〇〇〇円

釧路の窓(山崎安治) 二支社四〇〇円

西洋又南洋(山崎直方) 古今書院 二〇〇円

北の山南の山(吉沢一郎) 三省堂 六〇〇円

立山と白山(広瀬誠) 北国出版社 三〇〇円

枕頭山水(幸田露伴) 博文館 千円

カラ・世界の山々(山と溪谷社) 一〇〇円

極東の遊歩場(ウェストン、岡村訳) 山と溪谷社 八〇〇円

スキー講座全三巻(白水社) 三〇〇円

フランス・スキー術(アレ、近藤、菅原訳) 新潮社 三〇〇円

夏期登山研修会テキスト(文部省登山研修所) 三〇〇円

女だけのヒマラヤ(広瀬玲子訳) 人文書院 二〇〇円

最後の青い山(バーカー、安東訳) 二支社 三〇〇円

禁断の山(ナバアラ、川崎訳) 河出書房新社 二〇〇円

登山全書(河出書房) 五〇〇円

スイツランド五巻(万博スイス館編) 五〇〇円

山岳講座全八巻(共立社版) 三〇〇円

会報合本一五二一〇号(日本山岳会) 四〇〇円

会報合本二〇一〇号(日本山岳会) 四〇〇円

水河の救助隊(ヘルマン、青木訳) 二〇〇円

年報独標一(独標登高会) 六〇〇円

現代登山全集 北岳・甲斐駒 八〇〇円

山へ開く窓(勝見勝) 朋文堂 三〇〇円

ウスリ地方探検記(水谷国一) 満鉄社員会 五〇〇円

石楠花(東京登山歩流会) 八〇〇円

金剛山案内記(大熊浩三郎編) 二〇〇円

山岳講座(白水社) 全六巻七〇〇円

山岳ノート(ハイキング・ペン・クラブ) 二〇〇円

山ゆく心(田部重治) 一〇〇円

生活の中の山(小野幸) 三〇〇円

北アルプス新版(渡辺公平ほか) 一〇〇円

山岳放浪記(小島島水) 八〇〇円

上越の山(日本登高会) 六〇〇円

山信(勝谷松) 二〇〇円

|                              |                          |                             |                   |                  |                   |                             |                       |                          |                   |                 |                 |                |               |                     |                  |                   |                    |                     |                        |                     |                               |                              |                    |                             |                 |                    |                   |                           |                                |              |
|------------------------------|--------------------------|-----------------------------|-------------------|------------------|-------------------|-----------------------------|-----------------------|--------------------------|-------------------|-----------------|-----------------|----------------|---------------|---------------------|------------------|-------------------|--------------------|---------------------|------------------------|---------------------|-------------------------------|------------------------------|--------------------|-----------------------------|-----------------|--------------------|-------------------|---------------------------|--------------------------------|--------------|
| 日本アルプス第一巻(小島島水)縮<br>冊版 一五〇〇円 | 新しきスキーの山旅(山と溪谷社)<br>五〇〇円 | わが触れし岩膚(オージ・ニ・横<br>川訳) 二〇〇円 | 第三冬の華(中谷宇吉郎) 二〇〇円 | 北極星そのほか(山本一清) 百円 | 樹木の世界(中谷宇吉郎) 一〇〇円 | 若き日の山行(ラ・シニナル、近藤<br>訳) 一五〇円 | モゴール族探検記(梅沢忠夫)<br>五〇円 | 山岳図書展覧会目録(日本山岳会)<br>一〇〇円 | 登山全書夏山(松方三郎編) 五〇円 | 山行歌曲集(早川義郎) 一〇円 | 競技スキー(竹節作太) 一〇円 | 夏山入門(碓井徳蔵) 一〇円 | 尾瀬(平野長英) 一五〇円 | 上越の山(日本登高会)<br>八〇〇円 | 登山技術(高須茂)<br>五〇円 | 随筆山日記(高須編)<br>五〇円 | 黒部溪谷(冠松次郎)<br>五〇〇円 | マナスル登頂記(横編)<br>二〇〇円 | たった一人の山(浦松佐太郎)<br>一〇〇円 | カラコラム(今西錦司)<br>四〇〇円 | エベレストへの長い道(シブトン、<br>深田訳) 三〇〇円 | エベレストを目指して(ハント、松<br>方訳) 一〇〇円 | ヒマラヤ(徳岡孝夫)<br>三〇〇円 | アルプスに近ける人々(ゴス、近藤<br>訳) 二〇〇円 | 雪男(林寿郎)<br>二〇〇円 | 山と探検(今西錦司)<br>三〇〇円 | かいしの(河田模)<br>一〇〇円 | エベレスト登攀史(モラン、中田訳)<br>三〇〇円 | ヒマラヤに挑戦して(ベイトールド<br>小池訳) 一五〇〇円 | 藤木九三リーフ 三〇〇円 |
|------------------------------|--------------------------|-----------------------------|-------------------|------------------|-------------------|-----------------------------|-----------------------|--------------------------|-------------------|-----------------|-----------------|----------------|---------------|---------------------|------------------|-------------------|--------------------|---------------------|------------------------|---------------------|-------------------------------|------------------------------|--------------------|-----------------------------|-----------------|--------------------|-------------------|---------------------------|--------------------------------|--------------|

## △洋書

|                                                              |       |
|--------------------------------------------------------------|-------|
| Gibbs; Hills of India                                        | ¥ 800 |
| Jeffers; The Call of the Moun-<br>tains,                     | ¥ 500 |
| Robertson; George Mallory,                                   | ¥2200 |
| Paker; A History Geographical,<br>Discovery and Exploitation | ¥1500 |
| Shipton; That Untraveled<br>World,                           | ¥1800 |
| Seaver; Francis Youngshusband,                               | ¥1200 |
| Chapman; Lightest Abusa,                                     | ¥ 800 |
| A Dictionary of Geography                                    | ¥ 100 |
| Smythe; Camp Six                                             | ¥1000 |
| Noyce; Climbing the Fish<br>Tail,                            | ¥ 800 |
| Noyce; To the Unknown Moun-<br>tain                          | ¥1000 |

## 黒部幻影

福田夢汀著

柿原 謙一

奥黒部東沢出合東小沢の間におい  
て、昭和四十四年八月十一日鉄砲水も  
しくは土砂崩れによる愛息遭難の悲運  
におそわれた父は、息子遭難の真相を  
追求するために、またかか事故が再  
びおこらないためにも、「黒部幻影」  
を世に送った。この父は高沢虚子の高  
弟であり、俳誌「山火」を主宰する文  
学者、また戦前の学生時代から現在に  
いたるまで山を愛し登山を好んだ仁で  
ある。愛息善明君は滝谷や北岳・バット  
レス等の登山歴をもつ三菱商事の青年  
社員で、遭難時のパーティは福田・岡  
部の二名(岡部君は本会員)である。  
そして二名の遺体遺品ともに、数次の  
捜索によるも現在までな一つ発見さ  
れていない。

本書は、遺影一葉と、(1)黒部より還  
らず、(2)ともに踏みし山、(3)わが山山、  
(4)古き岳友、(5)山を想う、の五編と  
後記よりなる。(1)のなかの「逆縁」と  
(5)のなかの「山を想う」の二文は、「こ  
のたび公表されたもので、他はすべて  
俳誌「山火」に発表済みのものである。  
これを五編にまとめて出版したわけであ  
る。(1)は愛息の遭難・捜索・真相追求  
を内容とし、(2)は息子とともに踏んだ  
薬師岳・笠ヶ岳・赤石岳・穂高・金峰  
山等の紀行、(3)は著者が戦後踏んだ栃  
本・尾瀬・白根三山等々多くの山々の  
紀行、(4)は著者若かりし日の岳友への  
山信の形式で書かれた北アルプスの紀  
行文、(5)では著者の山に対する態度を  
語り、またいまは亡き大島亮吉氏を想  
いつ、終わりの章で、「最も山を愛す  
る私が、最も愛する山の子を、その  
山で失うほど悲愴なことはいない。現  
身を確かめる山は、遂に現身を確かめる  
ことのできない悲哀の場になってしま  
った」との心境を告げる。また書中随  
所に自作の句が掲げられているが、そ  
れは

秋風一片遺されし父何を為さん  
母哭かす夢の子日焼けいつも笑顔  
のごとくである。なお著者はさきに第  
五句集「秋風挽歌」によって、悲痛な  
る句心を版に付されていることを附言  
しよう。

本書を読了して真先に感じたのは、  
愛する子を山に失った父母の悲嘆  
・慟哭の大ききである。「嬰兒を見れば  
抱いたときを、幼児を見ればその頃  
を、学生を見れば入学の喜びを、登山  
姿の青年を見れば、その中にまじって  
いるようにすぐ思う」と父は愛息を  
追う。著者は文学者である。沓えゆく  
ベンは、ひとしく内に愛息を失った父  
母に共通する逆縁の悲愴を、代表して  
文章にしているとも申すべきであらう

そしてつぎに感じたことは、福田家  
にとつての特殊な慟哭である。父も山  
に登り、子もまた登山を愛したこと  
が、そして親子して踏んだ山行をもつ  
たことが、特有な悔恨と悲哀を生む  
本書の構成そのものが、その特殊さを  
浮き彫りにしている、私は思う。

本書は一幅の山水画の掛け軸にもた  
とえられる。(3)(4)(5)は画の生地であり  
淡彩の雲や遠景の山々に相当する。と  
もに踏みし山(2)は、濃彩にして重厚  
な近景の山水にあたる。そして(1)黒部  
より還らずは、気韻生動する中心の象  
形である。このように考えると、(5)  
のなかの最後の短文「山を想う」(二八  
八三〇ページ)が、悲しい落款と  
なるのである。父は山を愛した。福田  
家の生活の基盤の一つがそこにあつ  
た。愛息が生れて育ち、山に登る。父  
子ともに山を愛し、楽しい親子の山行  
の実現される。父はいくつもの遭難の  
話を知っているし、紀行でも度々その  
ことに触れている。子は冬の後立山縦  
走にさいして、凍傷にかかると。「それ  
以来、前から懸念していたことが身近  
かに迫って、山行のプランを聞くたび  
に、無理なコースをとらないことを注  
意した。実際、計画を変更した場合も  
あった」(九八ページ)という。しか  
し昭和四十四年八月十一日、愛息は同  
行者とともにその消息を断ってしまった。  
遭難遺物なき遭難を自認せざるを  
えなかつた父は、「……アクシデンツ以  
来、過去一切の楽しかった思い出はす  
べて音をたてて崩れ去り、悔恨と悲哀  
だけが寸時も胸から離れなくなってい  
まった」のであり「長い歳月、山を歩  
き、髪が白くなるまで山を攀じて得た  
ものは何であらう。すべてが虚しくた  
だ悲しみだけであつた」という落款  
を、本書の最終ページに押したのであ  
る。画ききった画幅がガタガタと崩  
れゆくのを眺めながら、落款を押す人  
の姿が私の目に浮ぶ。

しかしこの福田家にとつての特殊な  
悲しみとしてあげたことも、他の場合  
には特殊な事態が無いなどという意味  
ではない。父が山を知っているように  
まいが、A家にはA家の、B家にはB  
家の、それぞれ特有なことがあるはず  
なのである。しかし福田家の場合は  
父子ともによく山を知れる場合での悲  
しい姿が、典型的にてしまったのだ  
と、私は思う。

読了して第三に感じたことは、「黒  
部湖の寿命を二〇〇年と仮定し、今回  
八〇年ぐらゐも土砂が埋没したかもし  
れぬとか、……耳にした」とあり、「自  
然に逆らえば必ず抵抗がある」と書  
いてある(七一ページ)ところである。  
現代の自然科学は、広域にわたる土砂  
崩壊を黒部湖新設とむすび、その因果  
関係を検討したであらうか。それとも  
その必要はないことだと言いきれるの  
だろうか。それとも著者は、愛息が打  
ちつづいた雨の中を下りしたことにつ  
いて、自然に逆らったと述べているの  
だろうか。

読後感として特に感じた三つをあげ  
てみたが、つまるところは逆縁の父母  
の悲愴である。父は第一回捜索打ち切  
りのやむなき事情を聞いた現場で、闇夜  
の赤牛岳に稲妻が凄まじく交錯するの  
を見た。「二つの若い魂の、最後の苦  
闘を象徴するような異様な音なき叫  
喚」として、父はそれをうけとめた。  
さきに「秋風挽歌」について東京新聞  
は、「親を残して君死にたもうことな  
かれ」(筆洗、昭44・10・26)と評し  
た。「黒部幻影」読後感は、これと全  
く同じである。(一九七・九・一五)

(注) 著作は私にとつて俳句の師で  
は私にとつて心が痛む。しかし  
本書刊行の目的を考えて、あえて  
この原稿を投稿した。

# ソ連アルピニズム年鑑

——(一九六五—六七年)——

(三) 完

田村 俊介  
(在モスクワ)

## 競技登山

### 「チャトウイン攻撃」

A・スネサレフ  
D・チエレンシキン

一九五九年の同峰北壁の菱形岩壁の対角線ルート初登攀の記録である。A・スネサレフ、V・バルズイキン、B・カラブリン、V・スチエバノフの四名がこのルートを登り、L・ミイシャエフ、A・シモノク、O・コスムチエフの三人パーティーが真直ぐなカミンが北壁を分ける右側ルートを登った。本文は前者の四人パーティーの記録が大部分である。

この記録は次のような言葉でしめくられていた。今日までに二パーティーがスネサレフ・ルートを登ったが、ミイシャエフ・ルートをその後トレースした者はいない。しかし一九六五年夏、チエレンシキンが新垂直ルートを開いた。我々はこのチャトウインの敗北は最後のものとは思わない。今や若い世代のアルピニストが育っている。彼等がチャトウインと腕くらべをする日は近いだろう。彼等がこの壁に打ち勝つだろうということに危惧を差しさる余地はない。

### 「ウシバの永遠の人氣」

P・ポトタエフ

ウシバには合計二四のルートがあり、ウシバを試することはスポーツ・マスタへの必須条件のようなものである。本文ではアルピニスト達のたどっ

た同峰登攀の記録が年代を追って書かれている。

### 「ファン山群のカザフスタンのアルピニスト達」

N・バガヌツツ  
V・セジュニコフ

ファン山群は五〇〇m峰を一座も擁しているにもかかわらず、これまであまりソ連岳人の興味をひかなかったようである。アルピニズム年鑑でも一項目を設けてはじめて同山群の地理とその登攀史の紹介が行なわれた。私も昨年五月、中央アジアを旅した時、レナバードからドジャンペまでこのファン山群の峰すれすれに飛んだ。その鋭角に切れ落ちた峰々は壁には殆んど雪もつげずゼラフシャン山脈とギツサル山脈の間に立ち並んでいた。この山群にはカザフスタンやタジクスタンの中央アジアの岳人がよく足を運んでいる。吉沢一郎氏が「岩と雪」一八号でドルフ・レヴェンシュタイン、シュワルツの東独岳人の手になる「DAS FANGBERG」によりこの山群を紹介され、「この山群に関してはニコライ・バガヌツツという名前が最も主要で、彼には著書もあるらしいが詳細はわからない」と書かれているが、同文はこのバガヌツツとセジュニコフの共同執筆である。

### あとがき

ソ連アルピニズム年鑑の概略紹介はソ連領内の山の遠征および競技登山に

限定した。それ以外の論文や記録は邦文や英文で同じようなものがあるし、日本の岳人にはあまり興味がないと考えたからである。しかしここに若干私のもモスクワで会ったことのある、他の記録や論文の著者の紹介をしておく。

「大カプサン壁」を書いているV・シヤターエフはソ連の書記長アヌワリコフ氏の下で専従として働いている若手のクライマーである。「フチドリ」のボナツティ・ルート」を書いているオヴチニコフ、K・クジミンと共にソ連の副会長である。来日の経験もある。彼のバミール・天山・カフカスで残した数々の記録はさん然としており名実共にソ連山岳界の大黒柱である。オニシニコフは個人的なつきあいをしている三四歳の青年医師である。昨年はコムニズム峰南壁のオヴチニコフ・ルートの左よりダイレク・ルートを開いた。このルートはオヴチニコフ・ルートよりも垂直にコムニズム峰につき上げられており、よ

### ☆「ロープ野郎」の紹介☆

編集長の変ったA.J.71がやっとついたが、いつもの通り、追悼記と図書紹介欄を一番先に読んだ。そして後者でソマーヴェル老(八二歳)が三六歳のデニス・グレイの書いた「ロープ野郎」(Rope Boy)を紹介しているのを見てびっくりした。編集長のパイアットは余程の臍曲りらしい。

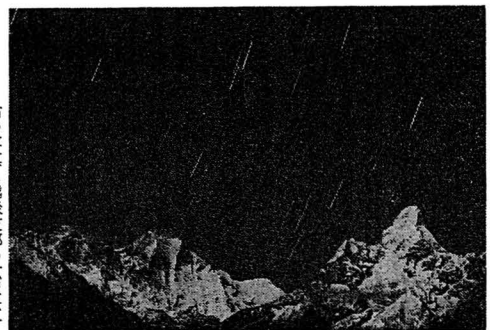
著者は子供の時から大いなる臍曲り党で、地方にある山岳会にも入っていないが、ACのような会でも大変毛嫌いしていた。しかしこれは少し大きくなつてから改宗したらしい。古い山岳会の存在とその伝統にも改めて敬意を表している。彼の山歴は目次を見ればわかるが、英国の岩場から始まり、クルー、ガウ

り困難なルートと考えられている。彼は毎年バミール・天山で六七〇〇m峰の六級バリエーション・ルートを登っており、ヨーロッパ・アルプスにも二度行っている。ヘルギアニきあとのソ連クライマーの中の第一人者と目されている。

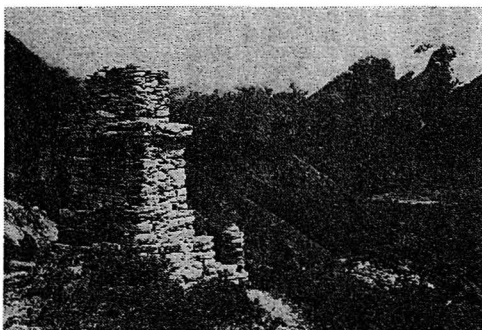
オニシニコフと話したところ、ソ連領内では魅力のある登山も次第に数少くなり、山の記録も段々新鮮さを失ってきた、今回のアルピニズム年鑑も、もう出版されないかと思つていたのである。事実同年鑑も創刊号(一九三二—四八年)は五八〇ページで初登頂記録が一杯つまっており、四九年以後五三年までは各年出版されていたが、五四年からは五四年—五七年、五八年—六〇年、六一年—六四年と数年単位でまとめられている。それも六四年までは四〇〇ページ前後であつたものが今回の年鑑では三三五ページと最も薄いものになっており、内容的にも新鮮さが無くなっている。(終り)

リサンカル、アルバマヨ、ヨセミテイ、ハイ、タトラ、ムカル、ベートになっているから、山男としては広く歩いている方であらう。しかしわれわれとして最も読みごたえがあり、かつ多くの示唆を含む最終章「疑問と結論」は英国の代表的青年登攀家が今どんなことを考えているかを知るよい文献であると思う。これだけは是非一度訳出してみたい。

彼の最初の指導者はアーサー・ドルフィン。書籍の上ではヤング、スマイス、シブトン、ママリ。そして自分にも最も近いのはママリだと言っている。そしてボナツティ、ブラウン、ロビンス、メッスナーを人間の能力の限界に近かつた登攀家としてあげているのも面白い。その他特筆すべきことが沢山書いてあるが、いづれまた(吉)



右の写真は越後支部の広沢一氏が去る五月一日、シアンボジエで夜更にとつたエベレスト。筋は星の動き。月令六・三、開放一秒F一・八、五五mmアサヒペンタックス。



これも同氏撮影。故成田君のケルンの右下につつましく立っているのが故深田久弥氏のケルン。



会員 山里寿男氏筆

## 海外

## 通信

シャモニーから

白旗 史朗

八月一日、日本を出発致し、イタリ  
ー、オーストリア、スイスをまわって  
唯今フランスのシャモニーにおります。  
このところ毎日晴天が十日も続き地  
元でも不思議だという位です。しかし  
霧が多く撮影に不向きなので、今のと  
ころ雨待ちの状態です。  
日本もそろそろ秋色、季節の変わり目  
ですのだけれどもご自愛の日々を過  
されますようお祈り致しております。  
(吉沢宛)

ラリ・グラスより

新島 義昭

無事カトマンズに着きました。途中  
カルカッタに一泊、山に入るのは明日  
以後ですが、今のところ身体の調子も  
よく、食欲も大いにあります。

アルジェリアから

市川 正

ただ本日は曇っていて、まだ山が見  
られないのが残念です。元氣で行っ  
てきます。(十月十七日) (吉沢宛)  
去年九月十三日、オラン空港に到着  
しました。仕事でなければあちこちと  
歩きまわりたいところですが、色々と  
仕事の方はきついらしく、思うにまか  
せぬらしいです。  
食い物はまずまずですが、水が悪く  
て閉口です。今の所、帰国は来年六月  
末の予定ですが、どうなることやら……  
「ここは地の果てアルジェリア……」  
という、「カスバの女」のレコードを  
聞きながら毎日を送っています。  
(吉沢宛) 九月二十日。

バルセロナにて

沖 允人

照明の国際会議に出席するためバル  
セロナに滞在しました。J・M・アル  
グラーダ(六九年、H・Kの隊長)に  
逢い、近くの岩山へ行ったり、スベ  
イン山岳連盟の会合に出たりしました。  
マドリッド(?)のテリリッ・ミ  
ル隊の登頂が疑問視され、検討されて  
いました。  
定例総会で私たちのダウラギリII峰  
(六五年)の話とハミリを上映し、喜  
んでもらいました。

先生が「山」に紹介された「スベ  
インの山岳界」のコピーをもっていき有  
用でした。一九七〇年の年報ができて  
いて一冊もらいました。会長も変わっ  
て、逢うことが出来ました。アング  
ラー氏が先生によろしくとのことでした。  
九月末には帰国します。  
(吉沢宛) 九月十五日。

ザンビア便り

G・グルーバー

今年はアジアの山へ行きませんでした。  
ここに七二年の二月一日までいま  
す。私はドイツ政府の地域計画の一部  
に従事しています。人々は友好的で  
とても愉快です。アジアのあとでは色  
んなことを知るべき新大陸です。  
来年あなたが国際山岳連盟の総会で  
スイスに来るまでには私も故国へ戻っ  
ていますので再びお会い出来るでし  
ょう。ルサカにて、九月一日。  
(吉沢宛)

キスム(アフリカ)にて

矢入 憲二

こちらに来てもう一カ月半になりま  
す。ウガンダとタンザニアの小ぜり合  
いが続いていて、念願のルワンダ、ブ  
ルンディには入れませんでした。  
ウガンダではルウェンゾリ麓、カ  
セセに十日間程滞在しながら調査に追  
われて残念ながらルウェンゾリ山塊に  
は入る機会がありませんでした。  
今、タンガニカ湖岸(ケニア)に  
あるキスムに来ています。ナイロビと  
違って日中暑く、夕方から降るスコー  
ルが待ち遠しくなります。  
二日後にナイロビに向い帰国準備で  
す。九月二十六日帰国の予定です。  
(吉沢宛) 九月八日。

フェアバンクスより

(10・17) 向 一 陽

ご無沙汰しています。アラスカの北  
極圏や南部の森林地帯を歩き回って  
います。先月末の天皇、ニクソン会見の  
ときは、オーロラが見事でした。  
天皇の往路、帰路の二日を除いては  
ずっと雨、氷雨、雪です。ここにも名  
の知られていない、すごい山、山城が、  
未踏のままうんとあるようです。

いつも思うのですが、どうして日本  
人は手あかに染まった有名なところに  
ばかり行くのでしょうか。(吉沢宛)

イスタンブールにて

花井 俊彦

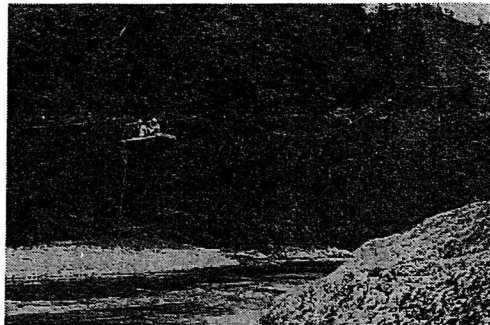
カトマンズでお会いして以来ご無沙  
汰致し申し訳ありません。生来の筆不  
精ですのでお許し下さい。「山」への  
原稿も書くかと思いついてつい書  
けず、結局日本へ帰ってからになりそ  
うです。

その後、五月十二日にカルカッタま  
で飛びジブを受けとって五月三十日  
よりアジアハイウェイの学術調査に入  
りました。

途中イランでエルブルズ山脈のタ  
クト・イ・スレイマン及びトルコでエ  
ルジャス山に登って、七月二十五日に  
イスタンブールにつきました。

イランでは山岳協会(イラン)のア  
デリー氏にグルー・ド・モレーヌの  
デマバンド・スキー滑降およびエルブ  
ルース、ザクロス両山脈の登山、神戶  
山岳会のエルブルズ山脈での登山の  
話を聞きました。

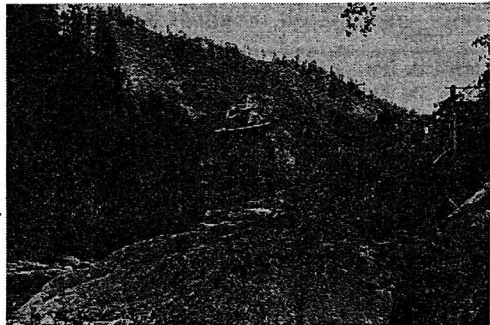
イランもトルコもともに面白い山が



沢山あり、学生の合宿地とか、ライト  
・エクスペディションにはとても面白  
そうで安上がり(ネパールに比べて)  
のようですが、英語が通じないだけ困  
ります。

今後は八月七日までに日本への返送  
品の通関を済ませ、八月七日にここイ  
スタンブールを出てソ連経由で八月十  
四日に横浜に帰る予定です。帰国し  
たらさっそく「山」「山岳」の原稿を  
書きます。それまでお許し下さい。ま  
ずは近況お知らせまで。  
(吉沢宛) 七月二十八日。

(注) 前出イランのアデリー氏が十一  
月はじめに突然日本にやってきました。  
長山協の丸山晴弘君が羽田へ迎えに  
出た。二ヵ月ぐらい日本に滞在する  
予定という。(吉沢)



これも珍らしい貴重な写真であ  
る。どこだと思えますか。黒部で  
はない、奥只見。今はというより  
田子倉ダムの出来る時に消えた吊  
橋。提供者は会津の宮森常雄氏。

## 〇〇〇〇〇一九七一年のヒマラヤ〇〇〇〇〇

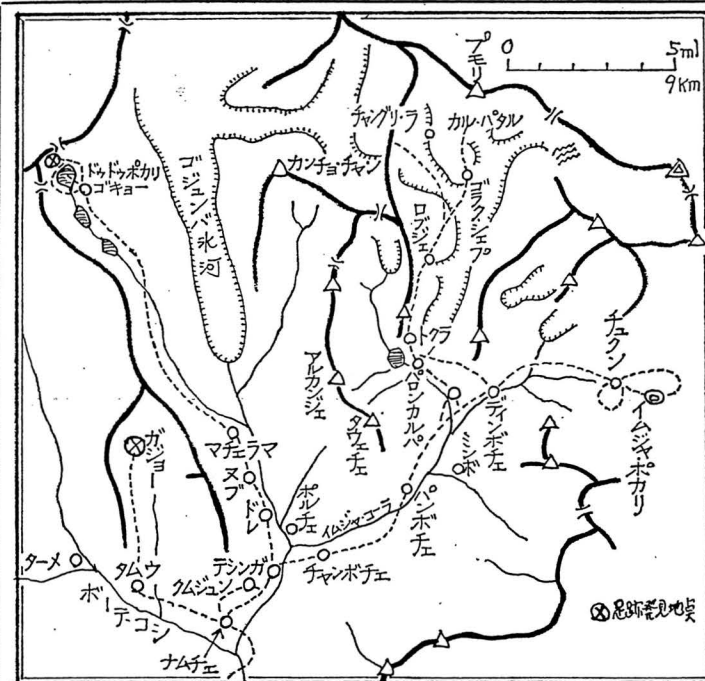
— 日本隊 —

## A・プレモンズン

## 五、雪男探検隊

隊員 谷口正彦(隊長、32)、佐藤一義(32)、因幡元光(33)、広瀬暁雄(31)、尾崎啓一(29)。  
活動地域 ナムチェ・バザールから北部およびモディ・コラ奥。  
活動概要 羽田発(714)、カトマンス(15)110および15、A隊キ

ハラバン、広瀬、因幡、尾崎、B隊飛行機でルクラ、B隊ナムチェ(16)、周辺部落にて民話、伝説収集(17)24、A隊ナムチェ着(124)、第一回搜索、クンパ氷河一帯全員(130)29、第二回搜索、一班、ガジョウ峡谷(谷口、因幡)、二班、下部地帯(広瀬、尾崎)214219、第三回、ゴジュンバ氷河一帯 全員(222)310、第四回、チャングリ氷河一帯、広瀬、尾崎



(316)325、第五回、アンナプルナ方面、谷口(323)45、第六回、イムジャ・コラ一帯(43)415、全員カトマンス着(427)。雪男の足跡らしきもの発見

(一)、二月十七日、ガジョウ峡谷、四二〇〇m地点(谷口、因幡)。  
(二)、三月七日、ゴジュンバ氷河、ゴキウ上部、五三〇〇m地点(尾崎)。  
(三)、三月二十九、南アンナプルナ氷河、四二〇〇m地点(谷口)。  
他に民話、伝説等多数収集。

## 六、ダウラギリIV(試登)

— 七六六一 —

最初に隊長芳野(服部)満彦君から吉沢宛てに来た手紙をご紹介します。

先日は大変失礼致しました……  
実は簡単なもので英文の報告書で申しわけありませんが一部同封致します。六九年のオースタリ隊のC3までしかわれわれは到達できませんでした。英文の報告書では六三〇〇mになっておりますが、正確には六二七三m峰で、われわれは『ヘル・リヒヤルト峰』と命名してきました。

どういうわけか、われわれの辿ったルートは大変雷が多く、ほとんど連日夕刻(三〜五PM)になると五〇〇〇m以上の高度では全身に電気を感じ、特にビッケルやハーケンにビリビリして登攀不可能な状態になってしまいました。

また積雪も多く六九年のオースタリ隊のときと比較すると(同隊に参加したシエルバの言)約三倍との由、またフィックスドロップもC1直下から(高度約四六〇〇m)C3上部(約六三〇〇m)までの高度差約一五〇〇m

の雪原後に約四〇〇〇mも使用するような、ちょっと考えられぬような悪場の連続でした。したがって同封のヒマラヤン・ソサエティに提出したようなサード・始めシエルバの逃亡事件などがありました。

とにかく、六九年のオースタリ隊のルートはよほど雪が無い限り非常に悪くまた長大なルートで、コナボン氷河からはダウラギリIVは不可能かもしれません。同じ長大なルートではカベコラのルートが良いと思います。またダウラギリIVに成功したオースタリ隊の話など聞くに北面からの可能性は充分ありそうです。

それから大変御迷惑ですが、スリス山岳会から小生の留守中にヒンズークシユの件で問い合わせがありました。小生昨年はギルギットに何日か滞在したただけなのでアフガンには行っておりません……その旨連絡はしましたが、一応その手紙を同封致します。もし何か連絡することがありましたらスリス山岳会の方に御指示下さい。誠に勝手なことばかりで申しわけありません……。

文春、大面白く、植村君の文と共に拝読させて頂きました。

七月十四日

隊員、服部満彦(隊長、39)、星野昌男(29)、高橋好輝(28)、中村喜治(28)、松田昭(26)、庄司五郎(25)、田中祥司(22)、浅葉雄二(23)、坂野俊孝(医師、26)。

活動概要、キャラバン

ボカラ・ヒアンジャ(315)、バウンゾール、ギジャン、ササダラ、ベニ、シマルチョウル、ダルバン(41)、シバン、ムリ、イゾパニ、ボガラ、ダブト、二八七〇m、BC(47、三五〇〇m)。

## ◇ 五大大陸の最高峰 ◇

「山」の十月号にスイスのライストと植村直巳君の五大大陸最高峰登頂のことが出ていたが、植村君はこれからコーカサスのエルブルス(欧州の最高峰五三三三m)を登ろうとしている。アメリカのカーターに頼まれたので一応表を作ってみた。山小屋なんかで話題の一つにでもなったら幸いである。(吉沢一郎)

| NAME             | ALTITUDE | 5-CONTINENT | DÖLF REIST<br>(1921) | NAOMI UEMURA<br>(1940) |
|------------------|----------|-------------|----------------------|------------------------|
| MT. EVEREST      | 8848 m   | ASIA        | MAY 24, 1956         | MAY 11, 1970           |
| ACONCAGUA        | 6960     | S. AMERICA  | FEV. 18, 1971        | FEB. 5, 1968           |
| McKINLEY         | 6191     | N. AMERICA  | MAY 11, 1961         | AUG. 26, 1970          |
| KILIMANJARO      | 5895     | AFRICA      | JAN. 12, 1969        | OCT. 24, 1966          |
| ELBRUZ           | 5633     | EUROPE      |                      |                        |
| OTHERS           |          | REGION      |                      |                        |
| MONT BLANC       | 4807     | ALPS        | SEPT. 4, 1950        | JULY 10, 1966          |
| NGOJUMBA KANG II | 7646     | HIMALAYA    |                      | APR. 23, 1965          |
| HUASCARAN        | 6768     | ANDES       | NOV. 7, 1965         |                        |
| FUJISAN          | 3776     | JAPAN       |                      | ?                      |

登攀活動、ルート工作及荷揚げ(48)10、C1四六〇〇m、411、C2(五一〇〇m、416)、C2419、サード、料理人他逃亡(52)、C3(五八〇〇m、510)、C4(516、六二七三m峰(522)、C3へ退却(523)、B(527)、帰途、B(531)、ドバン、ボガラ、キバン、ダルバン、ベニ、ササダラ、ギジャン、バウンズール、ボカラ(68)。

◆なお、英文の報告書の最後のところに書いてある文面を紹介する。

× × ×  
ヒマラヤ協会理事殿

大変残念なことです、われわれは次のことをお知らせ致します。

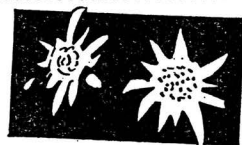
われわれのサード、アン・バブとシエルバ二人(A・ニマとハクバ・ゲルブ)が、われわれの勧告を振り切って隊列を離れてしまいました。その理由はこのまま登攀を続けることは余りに危険だということです。

サードは逃亡に際して私の私物と四〇〇ルピー相当の食糧を持ち去って行きました。資金などの計算もしてありません。

このようなサードやシエルバを将来他の登山隊に奨めた場合、貴協会の信用にかかわることが起ります。充分の注意が肝要です。

### ◇親子で署名した本◇

奥国のアド及びクルト・ディムベルガーの署名した「峰頂と神秘」の英語版が飛行便で届いた。カラー写真がないが伊語版から切抜いた所々に貼ってあった。愉快な本である。また一つ仕事が増えそうな気配。(吉)



アルプス  
だより

安川 茂雄  
七月上旬  
から八月下旬  
旬まで約五  
十日間、ヨ  
ロッパ・  
アルプスで

すごした。私にとってヨーロッパはじめての土地であるが、近藤(等)先輩や大倉大八氏の教導のおかげで楽しい山々の日々をすごした。

登った山といえば、観光登山者といったものだが、私なりに満足すべき目次でマッターホルンのツムット山稜を登れなかったのがくやしかったくらいのものであった。モンブラン、エギュー・ド・ミイデイのコスミット稜、メンヒの南西稜、アイガー東山稜などであったが、ヨーロッパ・アルプスの山肌の感触を私なりに味道できたことは嬉しかった。

ことにアイガー東山稜は、横さんの初登攀より恰度五十年目にあたっており、小屋で五人の日本人で祝賀をあげた。この小屋はまさしく日本人の近代アルピニズムの年輪を感じさせる金字塔であって、喉が熱くなるように私は嬉しかった。

これまで私はヒンズー・クシュ、バミールなど海外の山を味ってきたが、こんどヨーロッパ・アルプスにでかけてみて、山の味のさまざまな好みが変わって認識されたのだった。

ことに山が、アルピニズムがスポーツであるということが私なりに理解され、水平と垂直の山の違いがそれなりに理解されたのである。山靴にぴったりに密着するシャモニ針峰群の岩肌はまさしくアルプスの触感で、日本の山に味いたいものかも知れない。

三回目の海外の山であったが、アルプスは私にとって、私の肉体に登山の快感をもっとも鋭く刺激的に教えてくれたといつてよいだろう。せめてあと十歳若かったら……と悔やまれるような日々であった。

もっとも印象に残ったのが、まず「アルプス三つの壁」の時代がおわったということ、若い日本人クライマーの技術は、三つの壁を超えていると思った。ワン・シーゼンの三つの壁完登は、いくらか野心的なバーティに上って天候しだいでは至難なプランではなくなっているようだった。

そういった野心的なバーティといったら、なんといっても日本と英国であって、ただそのタクティクがひどくちがって対照的のようである。つまりデ・イファルト・バレー・ショールトにおいてのスピードが一つの問題になっており、この点では遙かに英国バーティは、日本バーティに卓越している。どちらかといえば、保守的な伝統のジャンブルなどとみられがちだが、事態はいちじるしい変貌をとげているかにみえる。

いまやヨーロッパ・アルプスに登山服装の東洋人といえば、日本人と相場はきまつているほどにはつきりしており、見方によつては「クライミング・アニマル」といえるかも知れない。

かつてアルプスの訪問者の多くは、洋行遊学の上流社会の子息によつて占められていたが、いま多くのクライマーは、まったく異質の階級——プロレタリアートといつてよいだろう。その狂信者はシャモニ、グリンデルワルト、ツェルマット周辺に山好きゆえになんらかの労働に遅く従事している。かくも山が多く若い山好きに占められているこの重量をおもくと、登山王国ニッポンと感得せざるをえないのである。

### ○お知らせ○○○○

ミューン・ヘン・ユース・キャンプに

ドイツ山岳会では来年八月二十六日(九月十日)に開催されるミューン・ヘン・オリンピックに際し、世界各国から四〇〇名の青年を招きキャンプを開くことにした。参加者はドイツ山岳会員と共に生活し、オリンピック競技も参観できる。旅費と私的な費用は各人の負担だが、滞在費はドイツ山岳会が出す。

ただし各人参加費として二〇〇マルク支払うこと。また各国の参加者は五名程度とし、それぞれ民族舞踊なり音楽を披露すること。当会ではこの催しに一応参加することとしドイツ山岳会に通知したが、参加希望者は海外連絡委員会に申しこまれたい。

### インド・プータン 合同登山隊の件

吉沢一郎様  
先日、山岳会でお話した、「クエンセル」のクラーカンリについてのプータン唯一の公報に発表された記事を同封いたします。

もちろん、クラーカンリは、チベット領内にあることを私は疑っています。この件については、西岡君も同意見です。結果がまたれます。

十月十七日

小方全弘

「クエンセル」第六巻、第五号

プータン王国政府週刊官報

一九七一年九月十四日

「インド・プータン合同登山隊」

ティンブにて、



この度立教大学HKK学術調査隊は最終年度の活動を終えました。隊員三名も無事下山し、お蔭様でピアフオ水河周辺で所期の成果を収めることが出来ました。後日機会を得てご報告する所存です。写真はピアフオ水河ホーロックよりバインターブラックを望んだものであります。

立教大学学術調査隊

高橋正治

(吉沢宛)

四六・一〇・一一

# 會員通信

## 玉山登頂記

沼倉寛二郎

台湾山岳会の招きでJAC三田会長ほか十三名の会員が十月九日午前十一時台北に到着しました。台湾山岳会の役員、会員多数の歓迎を受け、宿舎の天津飯店に落ちつき、午後から中山博物院等を視察、博物院の古代中国コレクション（世界的至宝）に接し、いままさに中国古代の偉大さに驚異の目をみはり、再認識した次第です。

夜は台湾山岳会のルームで会員、夫人の方々の心づくしの手料理のもてなしで盛大な歓迎を受けました。出席者は五十名ほどでした。蔡幹事長の司会で、周会長を始め、その他の鄭重な歓迎の挨拶があり、JAC側からは三田会長と平沢竜一郎氏のお礼の挨拶がなされ、なごやかな集りであり、異国とは思えぬ雰囲気でした。JACの集りもこのような夫人同伴の集会を持ちたいものです。

十月十日午前中は登山準備にかかりました。今回の登山隊のマネジャーであった小味氏が仕事の都合で急に中止になったことは、非常に残念でした。錦織臨時マネジャーにより、台湾山岳会、中央魚市場山岳会、特に劉氏の献身的努力のおかげで、どうにか用具、食糧もとのえ、また土曜日の午後にもかわらず台湾山岳会の尽力で入山手続きも出来ました。入山料は一人当たり五ドルでした。午後から建国六十年記念双十節国慶の式典に参列、われわれは特別席でした。夜は魚市場山岳会主催の歓迎会に出席しました。

十月十一日午前八時の特急で三田会

長、平沢、網倉、石森夫妻、小島（平沢氏孫）小野、神奈川、瀬川、錦織、沼倉、原田、松本熊、渡辺弥の十四名

浜田氏（交通公社）湯夫妻と娘さん、劉、春子夫人の五名の計二十名は台中から特別バスで日月潭経由、嘉義七時着。翌十二日八時阿里山へ、十月十三日は午前四時起床なので夕食後早々七時ごろ就寝、十三日は阿里山六時発の特別軌道で東埔に七時半着。心配した雨もあがり、時折りトンネルごとに玉山の山々の眺望に歓声をあげた。ポーター五名を雇い（一人当り日本円で二千元）八時半総員二十四名日本円に出発、玉山は遠く高く、十二公厘の山道をあえぎ、六時間余で排雲荘の小屋にたどり着きました。午後三時四十分すぎで、後続の三田、平沢（八十歳）氏の健脚に驚きました。

疲れた身体にむち打って自炊にかかり、温かいラーメンに満腹、このころからほとんどの会員が高山病にかかりましたが、衛生管理士の渡辺夫人の献身的看護のおかげで皆快方に向かいま

した。十月十四日体調を考慮して沼倉、網倉、錦織、小野の四名にルートリーダー湯夫妻と娘さん、ポーター一名は午前五時十五分ライトをつけ出発、幸い晴天無風で予定より早く六時五十分玉山の頂上に立ちました。頂上で記念撮影をし、七時二十五分下山にかかるとポツポツ降り出しましたがすぐ晴れました。下りは一時間ほどで排雲荘に戻りました。

登山路の管理状況は極めてよく、入山料を取るだけあって行き届いてスイスの山ほどではありませんが日本の山のように紙くずや空カンの山は見られませんでした。（一〇・一五）

▲会報に原稿をお寄せ下さい▲

## 梓会だより

代表幹事 茶谷東海

### 一、懇親会

今年から懇親会はテーマを定めて懇談することとした。今年のテーマは次の通りである。

#### （一）何故山に登るか

四月四日（日）正午より三時まで丹沢大山の阿夫利神社下宮接室で懇親会を開催、先づ筆者が「そこに山があるからだ」を引用してマローリーのエベレスト第三回遠征隊員としての悲劇的な最期を紹介した後、岡村治信、筆者ら日本山岳会員の外、元海軍十名、元陸軍一名、防大三名、女性六名計二十三名が自分は何故山に登るかにについて述べた。これを要約すると次の通り。

#### 第一の理由

人数

#### 健康、訓練

#### 自然に親しむ

#### 山が好きだから

#### 仕事からの解放

#### 無心、思索、反省

#### 山の好きを知りたい

#### 孤独を求める

#### （二）ハイキングコースを紹介する

十月二十四日（日）午後一時快晴の下、美しい紅葉に映える三峰神社に正式参拝の後、日高信一郎、柿原謙一、諸岡一、筆者ら日本山岳会員の外、元海軍九名、元陸軍三名、防大二名、女性四名計二十二名が宿坊に集まり自分の歩いたハイキングコースを紹介し合った。そのうち梓会として歩いていないコースだけの目標地を掲記する。

一泊コース 浅間山と黒班山。天城縦走。雲取山と飛竜岳。谷川岳。茶臼岳（那須岳）。燧山。温泉岳と根名草山。日帰りコース 荒船山。伊豆ヶ岳。

## 紀行と随想

### わが越後の山

新潟県の登山界を担う岳人二十余名が、上中下越・佐渡と、それぞれホームグラウンドの山に抱く憧れと歓び。その心を魅了してやまない越後の山々の、四季の美しさ、楽しさ、そして厳しさを飽くなく追究する、爽やかに量感あふれた山の本。

A5 本文五一四頁

写真 四五頁

特製本 上製箱入

限定一五〇〇部出版

定価 二五〇〇円

送料 一七〇円

発行所 学生書房

951 新潟市営所通一番町

TEL (〇二五) 三九六

振替 新潟 八四九

 新潟県境  
全縦走踏査登山の記録

 越後 6  
越後の国境  
A5 本文五二四頁  
写真図版四四五頁  
定価 一五〇〇円

へ五十二町二時間の道をとる。一町毎に石柱が立っている車道はうんざりする。バスを待つ茶店で採りたてのなめこを求めた。五時半西武秩父発の特急にゆっくり間に合い車中で乾釜、楽しい一日を終った。

## 深田先生の初盆

川北 仁

八月十四日、東京は薄曇りのむし暑い日であった。リユック、ビッケルの登山スタイルで東京駅に降り立った私の姿は多くの行き交う人々には少しちぐはぐな感じであったに相違ない。深田先生の初盆におまいりした後、谷川岳に登るのが東上の目的であった。明大前で下車、去年来た路を歩いたつもりなのに迷ったらしく、お家へ着いたのは正午を少し廻っていた。あらかじめ葉書を出してあったのが後れたので、奥様は、夜行で来られると思いましたが、と快くむかへ下さった。

早速先生が生前執筆されていたお部屋に通して頂く。盆提灯がいくつも飾られている中を御仏壇にぬかずき合掌する。お元氣だった頃の写真が二枚飾られている。去年晩餐会当日お目にかかったあの温顔も今では物言わぬ幽遠の人なのだ。告別式に来れなかった失礼を幾重にもお詫する。主人が好きたったからとうなぎ井を御馳走になる。冷いお茶をすすめながら奥様のお話がつづく。三月に急逝されたから残務整理、原稿の後始末、出版社との交渉と体が二つあっても足りない忙しさだという。幅ひろい活動された先生のこと何の前触れもなく言残すこともなく逝かれた今日、奥様の多忙さも判るような気がする。七月末に発行された「山頂の憩い」で山の名前一つにも各方面へ問合せて助言を仰がれた御苦心の程は、あとがきに書かれてい

る。悲しい登山となった茅ヶ岳のスナップは、一冊のアルバムにまとめられてあったが、同行された藤島先生の追悼文が胸を打つ、それに葬式の写真も見せていただいた。膝に手をおいて話される奥様の表情も沈んでくる。最後にキャビネ判の美しいカラー写真を示された。昨年十二月深田家で開かれたお身内だけの晩餐会の記念写真である。芸術院会員になられた御舎弟の中村光夫先生、外国から帰られた御兄弟夫妻を前列にして、深田先生は後列に喜色満面の表情で立っていられる。上衣なしの、ノーネクタイ姿だが、この写真を撮るとき何気なく洩らした主人の言葉が、妙に気になった。これが三月の茅ヶ岳の変事につながったのかとおっしゃる。これに似た話はよく耳にする。偶然の一致か、或いは人間は、何らかの形で未来を予知するのだろうか。「九山々房」とを笑いかける、錠を外しておいたと笑顔で案内して下さった。ぎっしり詰った洋書を拝見させていただく。あれこれと長尻になつてしまひ、玄関を送り出して貰ったのは三時を廻っていた。奥様ありがとう。お世話をかけました。

## 早池峰を守る

湯浅 俊行

最近の尾瀬の例に見るように、自然破壊の問題については、ようやく世論も関心を示してきているが、早池峰においても最近山麓の森林帯が伐採にわたたり。営林署によって急速に伐採されつつある「北山山の総合開発」の名のもとに大幹線村道が完成されつつあり、さらにこの幹線林道から伸びる各支線林道をもつて、山麓一帯のブナヒバなどの原生林の伐採が進められている。このままで行くと、近年中に早池峰

は限られた高山帯を残して裸の山になり、垂直分布の示すブナ、ヒバなどの原生林は勿論のこと、林床の亜高山植物と生息する動物なども破壊に至ることは必至である。

詳しい森林破壊の進行状況については目下資料を収集中であり、日本自然保護協会の山本弘氏とその保護対策を検討している。岩手県内の山において八幡平のように観光開発の触手に無策無為にゆだね、侵蝕させたことを悔恨し、その運命を早池峰に負わせたくない」と案じている。

## 会務報告

### 十一月理事評議員会

(4日午後時半本会ルーム)

▽出席者 三田会長、成瀬、吉沢副会長、中屋、山崎、藤井、宮下、中島、板倉、神原、松永、野上、坂下各理事、折井、望月、佐藤、村山、金坂評議員  
▽議事  
・上高地山岳研究所の件 (山崎)  
十月二十九日山荘委員会を開き、経過報告をした。自転車振興会からの交付金については一度文部省体育局にバックアップを依頼する。環境庁書類は現在長野県庁から東京の環境庁自然保護局にまわってきている段階なので、これも関係部門へ直接話しをするにしたい。また文化庁への書類は、松本営林署の同意書がもらえないので提出していないが、これも近日内に提出する。資金については明年四月から本格的に会員募金を行いたい。エベレスト・メダルの件(藤井)  
松本徹章から五十個隊員用に寄贈を受けたので、これを一次、二次、本隊の四十四名に贈ることにする。その他

は秩父宮妃、横、三田、加藤泰、毎日新聞、チャペル、作者高田氏、会に贈りたいが、二個不足(一個は予備)なので、これは松本徹章から購入したい。この件了承  
・自然保護の件 (板倉)  
十月三十日ルームで懇談会を開いたが、会としての基本的態度を決め、会報誌上でPRしたい。なお十一月二十三日甲府で行なわれる山梨支部の自然保護の会に板倉理事が出席する。  
・事務局服務規定の件 (中屋)  
従来の規定を逐条審議し、若干訂正する。訂正原文は事務局で保管する。  
・山岳復刻の件 (野上)  
「山岳」創刊号(明治三十九年四月発行)を三百部限定で復刻するが、会の事業であるから、その費用を会で一時的にかえてもらいたい。約三十万円である。この件了承。なお十月二十三日第四回図書交換会を開き盛会であったが、売り上げ金は十八万円あり、会へ五%、図書基金として五%寄付してもらった。委託図書、ネクタイなどの売り上げも三万円あった。

・韓国高所医学研究会の件(神原)  
十二月下旬ソウルで開かれ日本に招待状がきている。大森理事と連絡のうえ処理する。  
・コリー氏来日の件 (三田)  
十月中旬来日したコリー氏は明春デ

ンジン氏とともにインド隊のエベレスト映画を上映するため再度来日する予定で協力を依頼されている。くわしい日程は丹部理事のところにとくはすだが、会としても考慮しておいてもらいたい。  
・推薦状発行の件 (山崎)  
中大ヒンズブラジ遠征隊から推薦状発行を申請してきている。時期は十二月五月中で申請通り発行する。  
・静岡支部二十周年の件 (山崎)  
十一月十三、十四日もみじ会を兼ね

樺島で開かれる。本会代表として成瀬副会長に出席してもらう。なお静岡市内で十二月十一日二十周年パーティを開く予定。

・岩手支部創立の件 (成瀬)  
岩手に支部創立の動きがあり、近く書類が事務局にくるので、考慮しておいてほしい。  
▽報告  
・クリスマスカードの件 (神原)  
外国からクリスマスカードが本会あて二十枚ほどくるが、この返事について善処したい。  
・青年懇談会の件 (宮下)  
青年部を青年懇談会にして毎月、第二、第四金曜日ルールで集会を持っており十二月十一日発表式をやる。これは学生部で活動していたものがOBとなると、会員となってもルームへ来るチャンスが少なくなるので、若い人でも楽しくルームへ顔を出せるようなものにした方がいいのねらいである。十二月十一日にはモチツキ大会を開くことにしている。

・名誉会員、永年会員の件 (山崎)  
永年会員は今年に関西支部の栗飯原健三氏だけである。名誉会員については常務理事会で一応案を出し、全評議員に配布し決定したい。なお十二月四日の年次晩餐会の会費は二千六百円とした。  
・会員香典の件 (望月)  
会員が死亡したときの香典、花輪などについて常務理事会で内規を作っておいてほしい。  
・冬山講習会の件 (松永)  
十一月二十日から二十三日まで例年通り富士山五合目お庭小屋で冬山登山技術講習会を開く。現在二十五名の申し込み者がある。

## 図書室便り (昭和46・10)

## 新刊図書受入報告

毎日新聞社寄贈

(1)小西政経著『凍てる岩肌に魅せられ』

(2) 昭和46

実業之日本社寄贈

(1)ブルー・ガイドブックス編集部編『ローマとイタリアー JALシリーズ10』 昭和46

あかね書房寄贈

(1)佐伯富男著『エヘレスト村長日記』 昭和46

創文社寄贈

(1)加藤泰安著『放浪のあしあと』 昭和46

スキージャーナル寄贈

(1)加藤清男著『赤い岩壁』 昭和46

定期刊行物受入報告

【部報・会報類】

(1)長崎山岳会『おとあ』 (46-10)

(2)山村民俗の会『もじな』 No. 129 (46-10)

(3)北海道自然保護協会『会報』 No. 11 (46-9)

(4)兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』 No. 53 (46-10)

(5)国立公園協会『国立公園』 No. 261/262 (46-8/9)

(6)京都山岳会『京都山岳』 No. 558 (46-10)

(7)東京野歩路会『山嶺』 No. 498 (46-10)

(8)日本自然保護協会『自然保護』 No. 112 (46-9)

(9)低く山を歩く会『低山』 No. 76 (46-10)

(10)日本山岳協会『登山月報』 No. 30 (46-9)

(11)日本登山協会『山々』 No. 162 (46-10)

【雑誌】

(1)『アルプ』 No. 164 (46-10)

(2)『アルピニスト』 Vol. 3, No. 11 (46-10)

(3)『地図』 No. 35 (46-9)

(4)『岳人』 No. 293 (46-11)

(5)『山と溪谷』 No. 398 (46-11)

【その他】

(1)日本大学医学部山岳部『ヒンズク』

シニ医療奉仕隊計画書 '72 6月〜8月

(2)埼玉県山岳連盟『ナンガ・バルバート登山計画書 '72』

(3)金沢大学OB会『コンブライジ登山計画書 '72』

(4)H・K・Tニエース NO. 4 日本ヒンズクシンニ会議

Journals Arrived in

October 1971

1. "Alpinismus" 1971-9

2. "Die Alpen Monatsbulletin" No. 8 August 1971

3. "The Alpine Journal" V. 75 1970; V. 76 1971

4. "Appalachia bulletin" V. 37 No. 8 August 1971

5. "Der Bergsteiger" 38 Jahrg Heft 9, 1971

6. "Mountain Club of South Africa" No. 73 1970

7. "Österreichische Alpenzeitung" 89 Jah Folge 1377 Mai/Jul; Folge 1378 Juli/August 1971

8. "Rivista Senderos" No. 150 Junio; No. 152 Agosto 1971

ルーム誌 (46年10月)

5日(火) 玉山登山説明会

6日(水) 海外連絡委員会

7日(木) 学生部編集委員会

8日(金) 理事評議員会

青年部

11日(月) 自然保護委員会

13日(水) 学生部

14日(木) 青年部

15日(金) 第二七七回小集会「ヒマラヤ遠征に関する実務」

16日(土) 第二七七回小集会「ヒマラヤ遠征に関する実務」

17日(日) 講師 丹部節雄氏

18日(月) 稲門山岳会幹事会

19日(火) 図書委員会

20日(水) 常務理事会

21日(木) 青年部

22日(金) 図書交換即売会

23日(土) 図書交換即売会

24日(日) 学生部委員会

25日(月) 学生部委員会

26日(火) 婦人懇談会

27日(水) 学生部

28日(木) M・S・コーリー氏を囲む集

29日(金) 山荘対策委員会

30日(土) 自然保護委員会

10月中来室者 四九七名

秋の叙職

早川種三(九二二)は文化の日の

去る十一月三日付勲二等瑞宝章を受章された。

村田数之亮(一九四九)文化の日の

十一月三日付勲三等瑞宝章を受章された。

終身会員

三六八四 二階堂政雄(46年5月)

名称変更

三八四〇 第一勧業銀行山岳会 旧日本勧業銀行山岳部

改姓

六三七〇 渡辺節子 旧姓渡部

六四九三 奈良原町子 旧姓鈴木

退会 (46年10月)

二七二六 三瓶隆蔵

四〇八一 加藤幹太

物故者

六五二〇 千々岩 玄(四六・一〇・六)

六ダウラギリV峰で遭難

二六一一 入沢文明(四六・一〇・二)

九逝去)

## 第二七六回現地小集会

集會係 平野隆司

第二七六回現地小集会是、九月十五日、四十数名という多数会員参加を得て、奥多摩の盟主川乗山で行なわれた。当日青日青梅線始発駅立川には、続々と会員がJAC旗のもとに集合した。老若男女いかにもJACらしい幅の広い層だ。終着駅奥多摩に着くまでには、それぞれのコースに分かれて、まとまって下車していく。今日は、四隊に分かれた集中登山なのだ。われわれは、北西面より逆川を溯行する。伐採の深く進んだ様子に驚きながら進む。地図の読み違いなどのハプニングもあって頂上集合予定よりだいぶ遅れた五時近くに川乗山頂に到着する。夕焼に思わぬ美景を見ることが出来て、良い心持ちで、他のパーティの後を追って下山した。当日いきなり班長をお願いした会員の皆様にここでお礼いたします。

## 熊本支部秋季登山

十一月六、七日大分県竹田市で例会を開き、会員十名が参加した。荒城の月で知られる岡城跡や、武家屋敷跡、キリスタン神父をかくまったという洞窟礼拝堂跡などを見学し、会員首藤宗利氏宅に一泊して翌七日大分県本県境にある越前岳(一〇六九m)に登山した。紅葉の最盛期であり、地元竹田市からの参加者もあって全員登頂し、なごやかに晩秋の豊後路を觀賞して散会した。

## 新名譽、永年会員決る

新名譽会員として、十一月二十六日の常務理事会において、評議員推薦の

田中薫(一九一六年九月入会、会員番号四四四番)および若永信雄(一九一八年九月入会、会員番号六二八番)の両氏を決定、また永年会員には栗飯原健三氏(一九二一年九月入会、会員番号七九二番)がなられ、十二月四日の年次晩餐会の席上三田会長より発表された。

## 一九七一年度会員名簿発行

七一年度会員名簿は坂下理事を中心に作業が進められていたが十一月下旬出来上り、近く各員各位に発送の予定である。なお年次晩餐会の席上出席者に配布した。

## 第二七七回小集会

小集会是十月十五日午後六時半から本会ルームで「ヒマラヤに関する実務」と題し、丹部節雄理事を講師に行なわれ盛会であった。

## あとがき

山岳創刊号復刻版は目下図書委員の手により発行の準備を進めており、明年二月ごろには出来上る予定です。部数に制限があるので、まだ予約されていない方は至急図書委員まで御申し込み下さい。十一月末の連休に富士山に出かけ、大のようにふるえてきました。吉田大沢は例の通り大混雑でしたが、お庭のあたりほとんど人影を見ませんでした。よいお年を、来年もよろしく。(山崎)

昭和四十六年十二月十日発行

東京都千代田区神田錦町

三二二 向井ビル

発行所 社団法人 日本山岳会

編集代表 山崎 安治

(233) 七四四一

振替口座東京四八二九

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂



# 茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

## 森林・草原・氷河

加藤泰安著

＜A 5判482頁＞定価1,500円

## すこし昔の話

初見一雄著

＜四六判400頁＞定価1,200円

## 遠い山・近い山

望月達夫著

＜B 6判334頁＞定価960円

## 山の古典と共に

大島堅造著

＜四六判280頁＞定価1,500円

## 雪山・藪山

川崎精雄著

＜A 5変型判340頁＞定価1,200円

## 雪原の足あと

坂本直行著

＜B 5判206頁＞定価2,800円

約40年のキャリアをもつ編集と内容。  
赤いカバーでおなじみの……

## 山日記1972年版

日本山岳会編

＜A 6判368頁＞定価750円

## 山 岳

日本山岳会編

＜A 5判＞

総索引 1,000円  
65年 2,000円  
64年 2,000円  
63年 2,200円  
62年 2,000円  
61年 1,800円

## 国立公園カレンダー

国立公園協会編

＜A 5判リング綴り＞定価960円

## 屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編

＜B 6判202頁＞定価480円

## 山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編

＜A 6判126頁＞1集240円・2集280円

## 日高山脈

北大山の会編

＜菊判362頁＞定価2,200円

## 山に忘れたパイプ

藤島敏男著

＜菊判584頁＞定価2,500円

## 日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

＜A 変型208頁＞定価3,600円

## アンナプルナ日記

京都大学学士山岳会編

＜A 12取変型判170頁＞定価1,200円

## 登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編

＜A 5判350頁＞定価900円

## キンヤンキッシュ1965

東京大学カラコルム遠征隊編

＜B 5変型判220頁＞定価3,000円

## 登山・スキー用具専門店

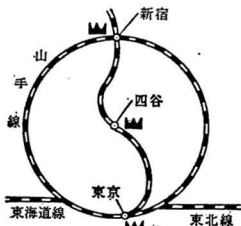
●買い易い  
山の店

## 山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101  
TEL. 06(362)5736

●北へ来たら  
山の店

●フレッシュな  
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地  
TEL (351) 7432・1912

八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五  
TEL (271) 1560・8575

新宿店 新宿ステーションビル四階  
サービスショップ  
TEL (352) 6564

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

## 山とスキーの専門店

## 片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なるべく なんにも  
持たない方がいい  
けれど、どうしても  
垂なるものがある。  
なにも人間でずかり  
そとで登山ですから  
どうしても必要なもの  
をこしらえておくる  
主責任はもっています

ゆるぎシテイ  
でんや 281-8456  
中央区小重4-1

香山荘

## 登山とスキー具

## イワタ

東京都中央区日本橋通2-1

PHON: 271-7686・1718

## 登山用具の専門店

## 好日山荘

東京店・中央区銀座2-4-5 (561)3600・(567)9031  
東京店・中央区銀座2-4-4 (561)0966 スキー店  
大阪店・北区宮崎町上一丁目47 (364) 0933 (代)  
福岡店・須崎町 1-4 (28) 34440

